

山口の「語り部」と「史跡散策」

野老澤の歴史を楽しむ会
(協力) 語り部の会



来迎寺の本堂・阿弥陀如来三尊（手前も阿弥陀さま坐像）

- 平成 31 年 4 月 18 日（木）9：15 ～ 16：00
- 参加者 32 名（内 語り部の会関係者 11 名）
- 散策のコース

山口公民館→美園上八雲神社→北廣堂跡→中央公園→
(昼食・椿茶屋) →緑道歩き→中氷川神社→山口小学校→
山口城跡（稚児の池）→来迎寺→桜淵地藏尊（解散）

(記録・編集 森田悦至)

山口の「語り部」と「史跡散策」の記録

○ 開会のあいさつ 粕谷眞さん



はじめに、今回の趣旨、本日の行程などについて説明がありました。

(語り部の部) ～ (内容の掲載は省略)

① 山口小学校にまつわるお話 (語り部～粕谷雅子さん)



地元ならではの話を「紙芝居方式」にて語りがありました。小学校の歴史を深く感じました。

② 山口城のお話 (語り部～岡部のり子さん)



地元が存在した「城」の歴史についてのお話でした。このあと、現地を観ることになりますので、その内容には、大変、興味深いものがありました。

お仕舞の部分で「心の休憩」として、「青葉城恋歌」「ふるさと」の歌を皆さんで合唱しました。

③ 本邦最大級と言われた寺子屋（語り部～粕谷眞さん）



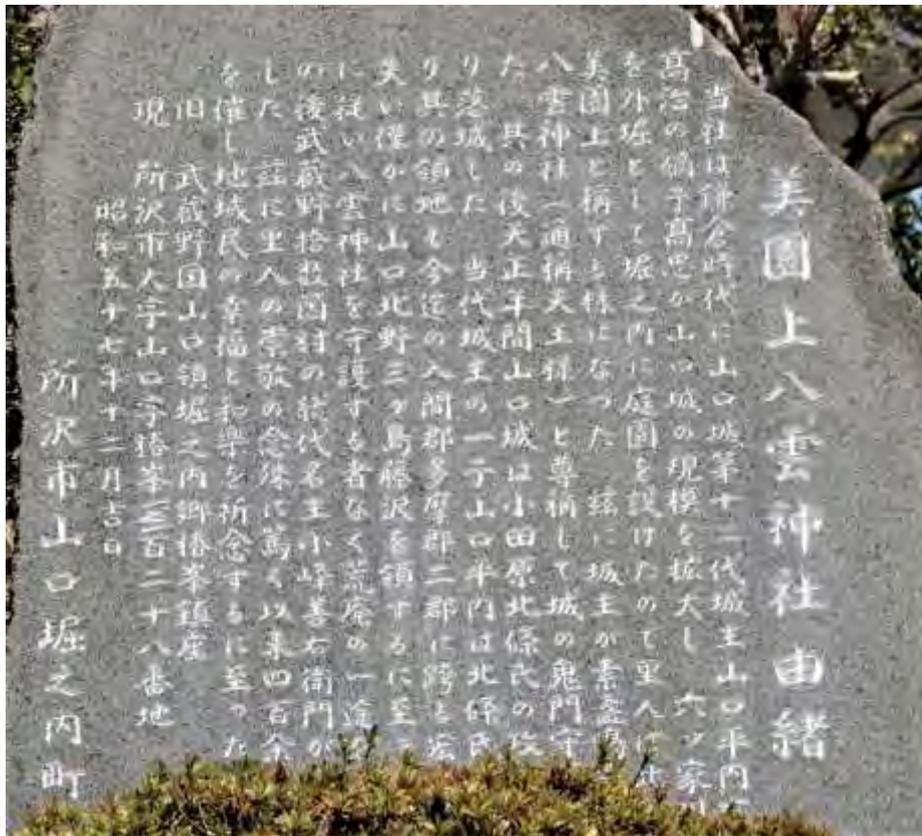
昔、狭山丘陵の山村地域でしたが、この寺子屋には遠くは新潟からも勉強する児童が集まったとの記録があります。その後の調べでも、寺子屋の児童数は断トツで多かったとの記録が残されているとのこと。また、この寺子屋から著名な方が輩出されているそうです。

（史跡散策の部）

○ 美園上八雲神社



八雲神社に到着です。大きなご神木がありましたが、今は枯れてしまっていますね！



境内にこの神社の由緒を掲げた石碑がありました。

○ 寺子屋・北廣堂跡



寺子屋があったところに到着。立派な桜の木に残り花が迎えてくれました。



寺子屋を運営された「澤田泉山」先生の事績が掲げられていました。(中) 言うことを聞かない子供を縛り付けた柿の木、180年ほどの年輪だそうです。(右) 庭の中央付近に立派な石灯籠が建っていました。

澤田泉山先生事跡

澤田泉山先生は文政六年（一八二二）十一月十五日、武藏国入間郡北入間村本橋吉右衛門の次男として生まれ、新五郎正勝と称した。弘化三年（一八四六）入間郡北野村広谷（所沢市小手指南）の澤田家を継ぎ、安政二年（一八五五）現在地において、寺子屋・漢学塾を開き、郷党の教育にあたった。泉山先生は天資英明にして克己、独創の人であった。幼少より諸先学の教授をうけ、和漢の学はもとより、算学・易・医学に通じていた。

泉山先生は生来能筆家であったが、万延元年（一八六〇）三月、京都青蓮院宮御門流の入木道（書道の流派）の免許をうけ、さらに元治二年（一八六五）二月、京都嵯峨御所江戸表御役所より「北廣堂」の号をゆるされ、書道の教授においても盛名を馳せたのである。

泉山先生の教育は創意工夫に富み、寺子屋の初歩的な、いろはうた・往来物より、四書五経などの漢学、また記紀・万葉などの国学、さらに算学の開平・開立を講じている。泉山先生は教授にあたり、教科書を執筆し自ら清書し、版木を彫り、印刷のうえ製本して筆子・門弟に与えた。また教育とともに研究にはげみ、『仮名遣日の出』を出版し、そのほか「製字俗説」をはじめ、「仮名遣明鏡」・「地震解」・「近郷村名」・「北野往来」・「人間碑集」など多数の著作をなしている。

泉山先生は明治五年（一八七二）の学制公布をうけ同六年より、北廣堂をあらため狭山学校を開校し、小手指小学校のいしすえを築いた。また明治二十五年、明治高等学校を狭山学校跡に開校し、向学心に燃える子弟を導いたのである。安政二年より明治十五年まで、泉山先生に学んだ筆子・門弟は一五七六名を数え、その規模は本邦最大といわれた。筆子の出身地は、近郷より江戸・川越・青梅など七十六か村におよんでいる。

後年、衆議院議長となった粕谷義三氏も九歳にして泉山先生に学び、その他地域の指導者として活躍した人々は、ここより飛翔したのである。

泉山先生の間接史料は澤田家において保存され、寺子屋時代より近代教育移行期における先人の努力を、我々に伝えてくれるのである。

平成十七年九月

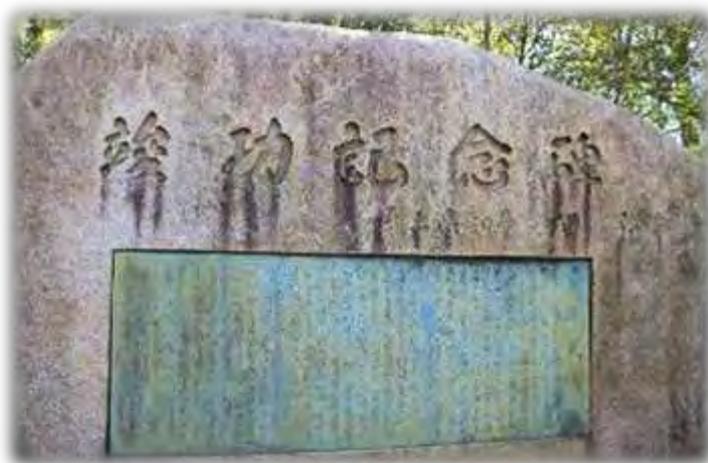
後学大原有吉記之

すばらしき「事績」です。特に、今でいう教科書は、自分で版木に彫って自ら刷って配付したほか、ほとんどことは、自らの手で成し遂げたと言われています。この地に学童が多かった所以が偲ばれます。



「澤田泉山」先生に思いをいたし記念撮影です。「良き弟子たちが来た！」と先生も喜んでおられるでしょう。

○ 椿峰中央公園



大きな石の「竣功記念碑」がありました。



ここでは地元にお住いの岡部のり子さん、説明をなさいました。

○ 昼食処 ～ 椿茶屋





以上、お蕎麦屋さんでの解説は必要ないと思いますが、幹事さんの事前手配などの準備が功を奏しました。



好天に恵まれ、さながらピクニック気分ですね～。



ここは「打越陸橋」と言って、「観覧車の見える風景」として景観スポットになっています。

○ 中氷川神社



コースの途上、中氷川神社のすぐ目の前に「粕谷家」のお墓がありました（左）。右は中氷川神社です。



中氷川神社の大鳥居、その奥に本殿が荘厳な姿で迎えてくれました。



歴史的にも由緒のある「中氷川神社」の本殿です。



境内の「金毘羅神社」の覆屋です。

狭山湖底に沈んだ「勝楽寺」の一部を移設したとか…。



境内に祀られている（左）「和魂宮」（中）「石上神社」（右）「稲荷社」。「和魂宮」に立派な神輿がありました。



「中氷川神社」参道から南へ、矢印のように「鎌倉街道」が走っていました。

○ 山口城跡



郵便局の前、この付近に山口城の本丸があったとか…。



藤森稻荷社。正一位と格式は高い。



山口小学校の南側。山口城の北限とか…。



山口小学校の脇を黙々と歩く参加者



山口小学校の校内に設置されている「山口城跡」の案内板（下の写真）。道路側から見ることはできないので、先生に許可を得て校内に入れてもらった。この案内板の設置の仕方はおかしい？



埼玉県指定文化財

旧跡 山口城跡

指定 昭和三十七年十月一日
所在 所沢市山口一五一七

平頼任は、狭山丘陵の南西部、現在の瑞穂町殿ヶ谷の地（推定）に館を築いて兵馬の実権を握り、村山氏を名乗った。その孫の家継は山口に居館を構えて山口氏となったが、この館跡が山口城跡である。最初の館は小さかったが次第に拡張されたものと考えられるが土塁・空堀等の残存部が少なく、全体の規模が明確でない。現在残っているのは、城の南東部と藤森稲荷附近の土塁・空堀だけである。

山口氏の子孫の中から荒幡に行き荒波多氏を名乗った者もおり、また分かれて久米に任んで、久米氏となった人も居る。

正平二十二年（一二六七）平一揆が川越で起こった時、山口氏は川越氏に味方して川越城によった。一説によるとその時、手薄になった山口城は足利の遊軍に攻められて落城し、川越から取って返した高清は城内に入れず、岩崎の瑞岩寺で自刃したと伝えられている。城内にいた夫人は、稚子を抱いて入水したといわれ「稚子の池」と呼ぶ池であった。

平成三年九月

所沢市教育委員会

問題の「案内板」。校内用に設置されたものか？ だが先生は設置されていること自体、不知だった。



幹線道路の交差点に設けられている山口城址の案内板（左）、そのすぐ後ろに「土塁」がある。歴史的な城跡であるはずだが、保存・管理に関してひと工夫できないものなのだろうか…。

山口城跡

指定 昭和二十七年十月一日

山口城は、平安時代末から鎌倉・室町時代にこの一帯を本拠とした武蔵武士の山口氏によって築かれたとされています。この場所は北に椿峰の丘陵がせまり、南は柳瀬川と町谷の湿地に囲まれた要害の地で、西側には鎌倉街道が通っていました。城跡の規模は、東西約四〇〇メートル、南北約二〇〇メートルと推定され、埼玉県の旧跡に指定されています。

築かれた頃の大きさは不明ですが、戦乱の時代に館と郭（曲輪）を囲む土塁や堀は徐々に増え、室町時代には複数の郭（曲輪）があったと考えられます。この城跡には石垣がなく、土塁の上に木や竹の柵を造り、幅が広くて深い堀をめぐらせて侵入者を防いでいました。江戸時代になると城跡は畑や宅地として拓かれ、堀跡は溜め池に利用されました。その後、道路や鉄道が開通し、元の姿はほとんど失われましたが、現在でも周辺には「堀之内」「城上」といった城跡に因る地名が残されています。

土塁と堀跡

山口城跡は、昭和五十一年から平成二十一年にかけて、第一次から第十次の発掘調査が断続的に行われていています。特に第八次の発掘調査は広い範囲の調査区となり、複数の土塁と堀跡が確認されました。

確認された土塁の規模は、幅一〇メートル前後、長さ一〇―二〇メートル、高さ三メートル前後です。第一、二号土塁が並び、その間に南北方向に伸びる第四、五号土塁がありました。東へ張り出す第三号土塁の平面形は、元は「コ」形であったようですが、現在は「L」形になっています。

土塁の外側には堀がめぐり、上部幅約四メートル、底部幅約三メートル、深さ一・二―二・五メートルの逆台形で、発掘時は底から水が湧き出して沼地のような状態でした。

土塁の下で多数の柱穴や焼土とともに井戸跡六基が見つかり、土塁が造られる前の時期に建物があったことが推測できます。堀跡の底から木製椀と修験者に因る「神伝」という木製品が出土しました。

調査の過程で堀跡を検出してきましたが、土塁は崩されることがあり、残っていない箇所もあると考えられます。

郭（曲輪）

第八次調査区の上塁に囲まれた内部は東西約二〇メートル、南北約三二メートルの長方形の平地となりました。これを「くるわ」と呼び、何回か繰り返し整地が行われたようです。

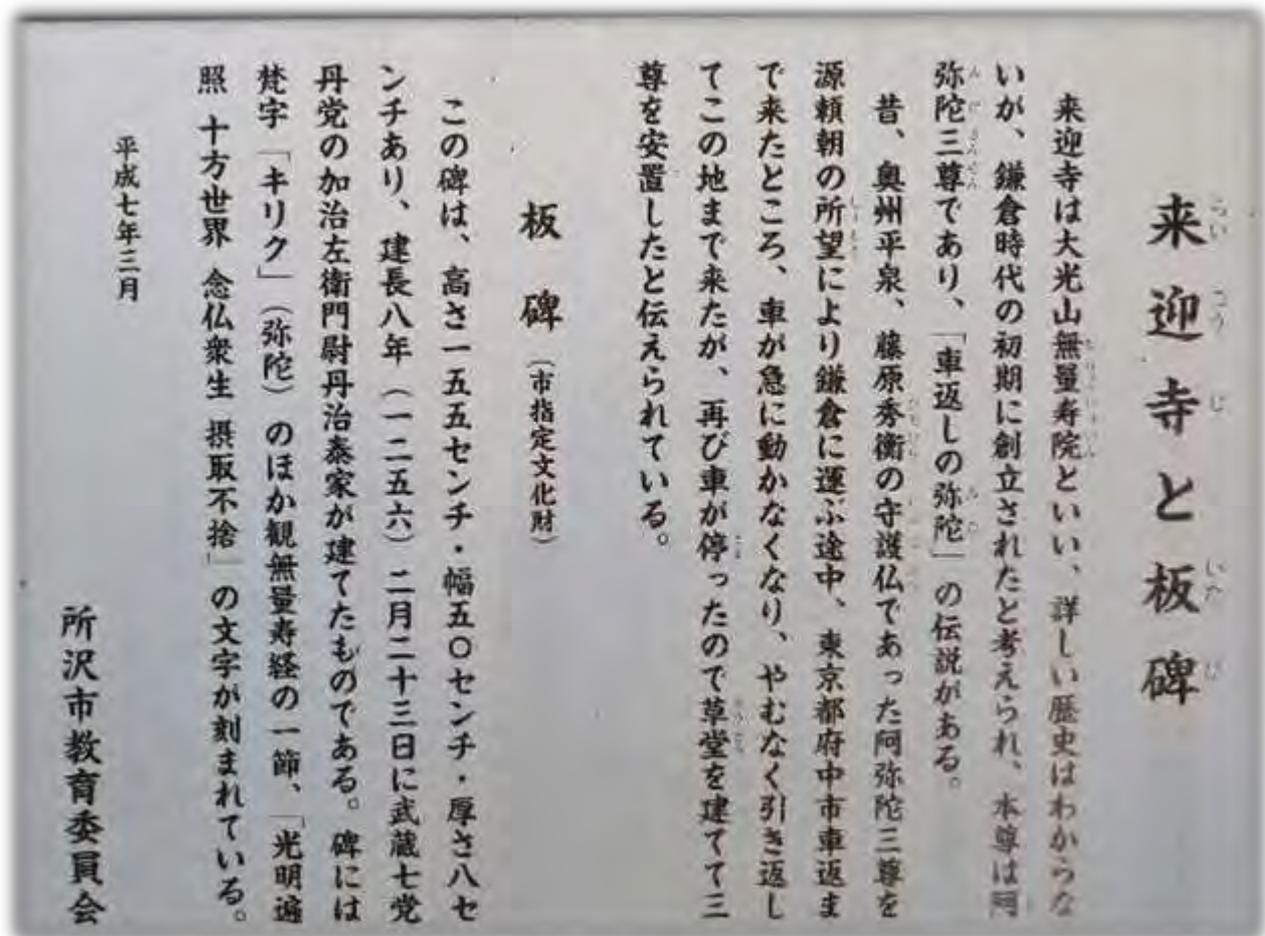
主に室町時代の遺物が出土し、陶器・常滑焼の妻の破片、勢力関係がわかるカワラケ、年号が刻まれた板碑、銅銭の永楽通宝などが出土しました。



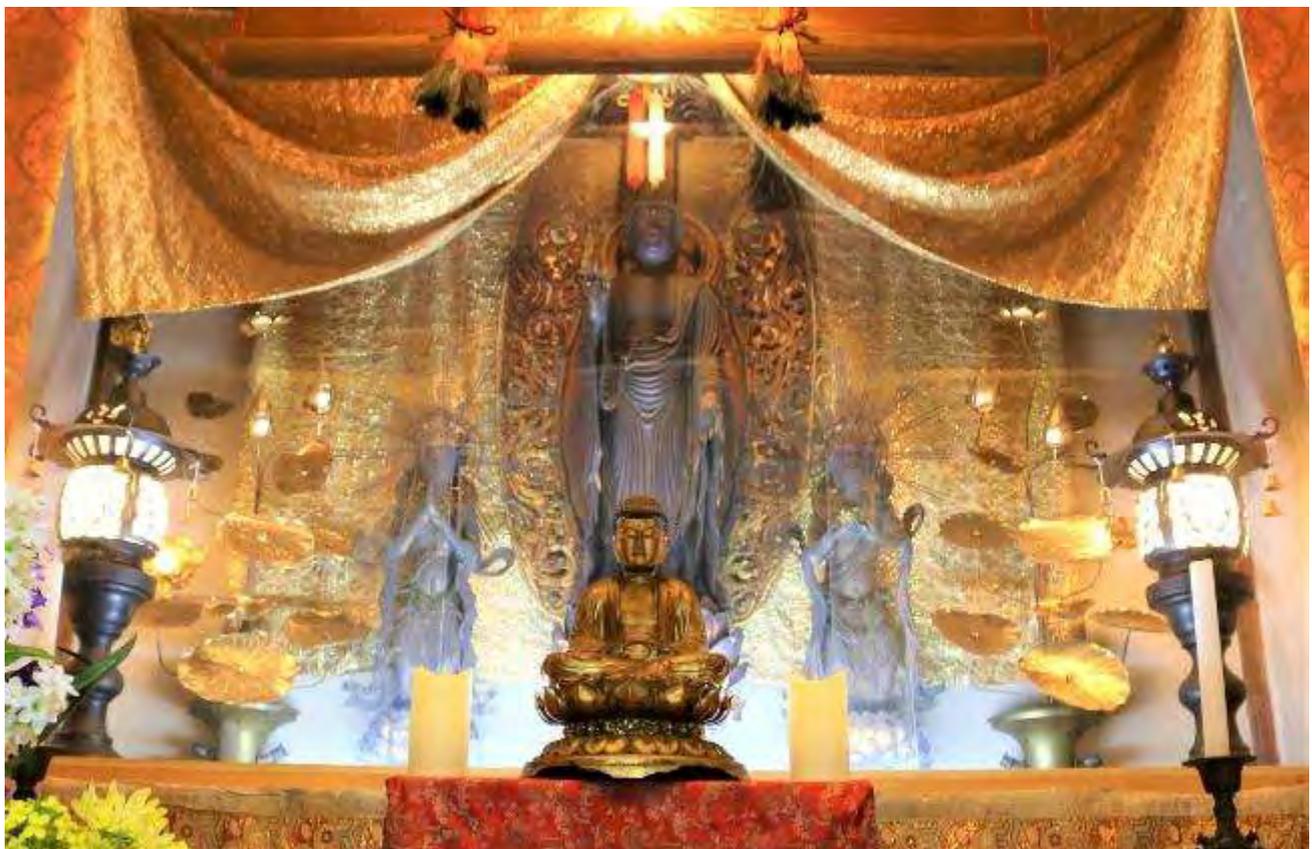
「稚児の池」の今は西武狭山線の小さな鉄橋が渡っている。傍らに小さな祠が祀られています。（前ページの案内版、後段を参照）

山口氏について
ひらやまのりとう
平安時代の末期に村山頼任の孫にあたる家継は、この地に移り住んで地名の山口が名字になりました。山口氏は「保元物語」や「吾妻鏡」などの歴史書にもその名が記されており、武蔵武士の一員として活躍していたことがわかります。

○ 来迎寺見学と民話



来迎寺の山門前に掲げられている「板碑」の内容



本堂に安置されている「阿彌陀如来三尊」。今は黒くなっていますが「金糸で施され金色に輝く立派なもの」との説明がありました。手前の坐像も阿彌陀さまですが、藤原秀衡は、こうした坐像を贈った慣わしのある方とされているようです。



本堂内に祀られている、(左)「地蔵菩薩」、(右)「文殊菩薩」



忙しいさ中、丁寧にご説明いただいたご住職さま。先代ご住職さま、現ご住職さまの奥様にも陪席いただき、お茶までご馳走になり、感謝に堪えません。心から御礼を申し上げます。



記念撮影にまでご対応いただき、ありがとうございました。貴重な体験と知識を頂戴しました。



山門に移動してから「佐藤美津子さん」(右)に民話のお話をいただきました。

○ 桜淵地蔵尊伝説



「桜淵地蔵尊」を訪れる。



お社の前で「中村眞一先生」から民話をお聞きする。(右)は、今の「桜淵」

以上